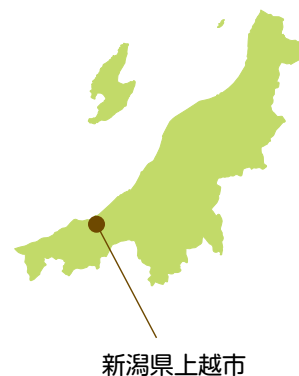


両親の姿に憧れて就農した長女と三女の活躍で、経営規模が拡大！

株式会社花の米

※2018年3月現在

代表者名	黒川 義治	資本金	3百万円
設立年	2012年3月19日	売上高	43百万円(2017年2月期)
事業内容	生産(コメ、ネギ)、消費者直売、加工・製造、作業受託	経営規模	田36.5ha、畑0.28ha、作業受託(水稲→一貫受託0.6ha)、加工施設52.9㎡(もち、おかき)
従事者数	5人(うち女性3人。女性内訳：一般職1人、常勤パート2人)		
女性活躍支援	[女性に配慮して取組んだ環境整備] 施設設備関係(屋内トイレ)、重労働等の業務改善		



経営概況

北陸新幹線の上越妙高駅から車で約20分、日本百名山のひとつに数えられる妙高山を眺めながら田園地帯を走ると、静かな集落に株式会社花の米が現れる。稲作をメインに野菜、もちなどの加工品を生産する同社は、先祖代々の農地を活かし代表の黒川義治氏が妻の薫氏とともに1995年に創業。現在はメンバーが増え、総務全般を長女・松野千恵氏、自衛官を退官して就農した千恵氏の夫・直人氏が加工の6次化を、三女の黒川沙希氏が生産を担い、家族5人で経営している。黒川氏の祖母の名前からつけた「花の米コシヒカリ」のほか、地域の料理店などで廃棄される蟹殻のリサ

イクル肥料で栽培する「越後かに米こしひかり」、イタリア品種米のカルナローリーなど、独自性のある品種を生産。3年前にはネギやレンコン、観賞用のハスなどの露地野菜が加わった。

長女・千恵氏が入社して営業に力を入れたことで飲食店の取引件数が倍近く増加(2013年19店→2016年35店)、三女・沙希氏も農作業の半分を担うまでに腕を上げて経営の規模拡大(入社当時2014年29.8ha→2016年36.5ha)につなげるなど、2人の娘が大活躍する農業法人である。

1. 経営者の理念・意識改革

黒川夫妻は子供たちが幼い頃から農業の楽しさを教え、仕事の手伝いや地域の集まりにも積極的に参加させていた。当時13歳だった長女の作文を商品の米袋の裏にプリントし、得意先に好評を博したとか。「いつもどっしりと構えている父、常に三歩下がって父のことをサポートする母、そんな両親の姿に憧れて小学生から家を継ぐことを決めていた」と長女・千恵氏。農業系高校を卒業後、テクノスクール・ビジネス科で経営・事務を1年間学び、2006年に20歳で就農。三女・沙



希氏も中学生から農業を志し、父姉と同じ農業系高校に進学、地元の先進農家で2年の研修を経て2014年に就農した。

黒川氏は長女の就農の希望を聞いた当初、内心ではとても嬉しかったが、それまでの経営に不安定さを感じていたことから、さらなる経営発展を目指すことを決意した。2012年に千恵氏を中心となって登記の手続きを行い、株式会社を設立。三女・沙希氏が入社後は、彼女が研修先で学んだ野菜の生産を新規で始めた。2017年には会社の敷地内に餅とおかきの加工場を新設し、長女の夫・直人氏を中心に6次化をさらにパワーアップさせる。

2. 女性が活躍できる環境づくり

長女・千恵氏は会社設立時から事務・経理のほか、新規取引先の開拓や消費者交流にも力を入れ、夫婦で経営していた時代に比べて販促や営業活動が充実するようになった。

イタリア品種米でリゾートに使われるカルナローリーの生産は、取引先のイタリアンレストランの社長が彼女の人柄を見込んで依頼したのがきっかけで、2014年に5aの土地からスタートし、2017年現在は90aまで増えている。

父とともに生産部門で活躍する三女・沙希氏には、女性が操作しやすい57馬力の新車トラクターを彼女専用で購入。「水田の畔を傷つけないように操作する、ブレーキをなめらかにかけるなど、機械を大切に扱うのは自分よりも上手にできる」と黒川氏。おかげで以前よりも機械の故障が減り、経費削減につながっている。また2016年よりレンコンのコンテナ栽培を沙希氏主体でスタート。泥田で作業する時の冷えと重労働から解放され、女性に優しい栽培方法ということで黒川氏が沙希氏に勧めたそうだ。近隣にはレンコンを栽培する農家が少ないが、あえて新しい作物に挑戦し、沙希氏が得意な野菜生産の拡大を図る。このように

黒川氏は商談・販売販促の企画から農作業管理まで娘の意見を積極的に取り入れ、彼女たちが自主性を持って生き活きと働ける環境を作っている。

3. 女性の働きやすさの形成

就業規則の中には、将来に備えて母性健康管理のための休暇のほか、子供の看護休暇や育児・介護休業について盛り込まれ、女性が働きやすい制度を整えた。職場環境にも気を配り、トラクターなどの農作業機械は女性でも楽に操作できる機種を採用。新設の餅加工場は、女性に使いやすい作業台の高さや動線に設計されている。また、社名のロゴが入ったおしゃれな作業服は娘たちが主体となってデザインし、イベントのユニフォームとしても重宝している。

「家族経営だからこそ日常の言葉に気をつけている」と、黒川氏。家族ゆえに我慢できる点もあるが、ある一線を越えると家族だからこそ修復が効かなくなる。あとから“言い過ぎた”と後悔しない伝え方を肝に銘じているという。時には意見を活発に交わしてぶつかり合うこともあるが、自分と肩を並べて仕事に取り組む娘たちを誇りに感じ、2人を前途有望な若き女性農業者へと着実に育成している。

審査委員の声

子供たちの就農で1家族から複数家族経営へ。長女千恵さんはビジネススクールで経験を積んだ事務・販促・6次化を担う。きめ細かな就業規則や販売イベント用動画、かわいいつなぎユニフォームなどの充実に貢献が見られる。そして三女の沙希さんは女性が大型機械を扱うメリットを示し、近所の農家から応援のご指名にもつながっている。千恵さんの夫も加わった大家族経営。各個性を活かし議論は活発、父義治さんを中心に仲良し家族像が印象的だった。